

# お寺の社会性

—生奥坊主のつごやき—

## 拾八

### 竹中尚文

#### 1. 儀式

前回、カクレキリシタンの話しを書いた。書きながら、何百年という宗教の存続において、儀式の力が大きいことに気が付いた。儀式が社会の変化に対応できない時は、その宗教が存続できなくなる可能性が高い。儀式を変化させられるのは、その宗教についての知識である。儀式の構成事項が、どのような意味を持つのか知らなければ、社会変化に応じた儀式の変化も不可能だ。

例えば、私は法事後の食事会が必要なのか、と尋ねられることがある。この食事会のようなことを仏教では「お斎(とき)」と言うが、その起源と意味を知らなければ、法事に「お斎」が不可欠であるのか不必要であるのか言えない。

私は、自分があまり儀式に向いていないような気がしている。まず、ふざけた顔をしている。お参り先の家で「スーパーマリオの坊さん」と呼ばれているようだが、そんな顔をしている。スーパーマリオが僧衣を着た姿を想像していただきたい。

私は、ありがたそうに儀式をする坊さんではない。自分自身がありがたくもなければ、偉くもない。だから私がお参りをする姿に、ありがたさを感じる人はほとんどないだろう。私は儀式を行う坊さんとしては不適任かもしれない。それは、かつての私が儀式を軽んじていたからかもしれない。

ある時、老婦人からお参りを依頼する電話があった。孫のためにお参りに来てほしいと言う。「なんで？」

と尋ねると、「孫が拒食症で困っている」と答えた。私は病院に行くことを勧めた。私は、拒食症を治すことはできない。私にも、お経にもそんな力はない。しかし、老婦人は、引き下がらない。結局、私はお参りに行かなかった。孫は入院して回復したそうだ。

また、別の老婦人からお参りの依頼の電話がかかった。彼女は、踏切の傍に家を購入した。昼間は一人で留守番をしていた。ある日、すぐ傍の踏切で鉄道自殺があった。彼女がいつも使う洗濯物干し場にいくつかの肉片が張り付いているのを見たそうだ。その夜から、眠れないという。彼女は、私に仏壇に向かってお経をあげてほしいという。私がお経をあげても、何の効果も無いと思う。それより、病院に行くことだと返答した。彼女は、すでに通院していると答えた。私は気休めにしかならないよと、言ってお参りをした。一週間程して、電話で彼女に様子を尋ねた。少しずつ眠れるようになってきたと答えた。

この二つの事例で、一方には私はお参りしなかったし、もう一方にはお参りをした。お参り依頼の要件は

さほど変わらない。どちらも儀式的というよりは呪術的なお参りを要請するものであった。

ずっと以前の私であれば両方の要請にお断りをしただろう。

ところで、最近読んだ本(『統合失調症』岡田尊司著)の中で、最近の精神医学が精神に対する関心を無くしている、と言う指摘があった。もちろん薬物療法等によって症状の軽減が重要であることを認めた上での言及である。同じようなことは、よく聞くことがある。病院に行き診察を受ける時、医師はコンピューターのモニターばかり見ている。モニターに映し出されるデータばかり見て話している。患者を見てくれない。診てくれているのだが、見ていない。このような話しは、私たち坊さんも同様である。お参りに行って、仏壇の仏具、お参りの仕方、お経のあげ方がどうのこうのと言って、仏様のことを話さないで帰って行った、と聞いたことがある。

透明性、分かりやすさが重要視される時代である。私たちにとって、儀式や作法のことを言うのは易しい。これは正しい、これは間違っている、と明快である。明快なことだ

けを語っていると、私たちはいずれ逼塞してしまうだろう。

## 2. 御布施

儀式によって私たち僧侶は御布施をいただいて帰る。御布施をいただくという経済的な面から言えば、儀式を増やせば経済的にうるおう。家族を亡くしたばかりの人に向かって、「あなたの〇〇さんは、まだ成仏していません。だから、私が回向(えこう)してあげよう」と、儀式を売り込む僧侶もいる。

人々が望まない儀式に、出向くのは気が進まない。たとえば、法事を勤めたくないけれども親戚がうるさいから仕方なく法事を勤める人がいる。そんな所にお参りに行く時は、足が重い。法事を勤めたくはないという気持ちは私にもすぐに伝わる。そこで、明快な儀式のみを執り行い、御布施をいただいて帰る。次があるだろうか？次にはうるさい親戚がいないかもしれない。その時、法事を僧侶に依頼するだろうか？今、親戚付き合いは薄くなる傾向にある。次の法事の時には、親戚に声をかけないだろう。うるさく言う親戚と縁が切れれば、法事を勤め

ることもないだろう。それを、僧侶たちは人の繋がりが薄くなって、仏事が廃(すた)れると嘆いている。

しかたなく勤める法事にお参りをするのは坊さんにとって嫌なものである。こんな時は儀式だけを執り行って、御布施をいただいてさっさと帰るのも一つである。あるいは、お参りにやって来て、荘厳(しょうごん：佛前の飾り付けのようなもの)や作法の話しかしない坊さんのことをよく耳にする。しかし、それでは仏事が廃れ、仏教が減びるのではないか。坊さんは仏に向かい、その人に向かい、人に出会い、仏に遇うのが本務である。人に出会い、仏に遇うことが仏縁である。しかたない気持ちで始めた法事でも、仏に遇うことができれば、気持ちが変わりはしないか。気持ちが変われば、次回の法事を止めてしまわないかもしれない。儀式の継続が可能かもしれない。儀式が続かなければ、宗教も続かない。儀式が続くには、社会に適応しなくてはならない。

## 3. 蓄財

紀元前の仏教では、僧は金銭を持つことを禁じられた。今でも東南ア

ジアやスリランカでの仏教において、その戒律は有効である。僧たちは、毎朝の托鉢によって日々の糧を得る。その日暮らしである。

一方、紀元後2、3世紀パキスタン東北部にはずいぶんと多くの仏教寺院があった。今、それらの遺跡を見ると、多くの寺院には倉庫があった。戒律に反して蓄財をしていたことになる。この地方の自然環境や社会環境から見ると、その日暮らしの可能なところではないと思う。もちろん大乘仏教という新しい考えの始まりと言うこともあっただろう。仏教は新たな環境の中で伝統に忠実であったとは言えない。今も私たちは金銭に触れるし、将来のために蓄財もする。

かつて、私がお参りに行くとたくさんの食べ物をくれるお婆ちゃんがいた。そのお婆ちゃんは、自分が一人暮らしであるから、食べきれないとくれる。食べきれないと言って、封を切っていないダンボール箱を何箱もくれる。一人暮らしの老人が、購入する量ではない。そのお婆ちゃんに、なぜ私のお参りに合わせてこ

んなにたくさんの食べ物を買うのか尋ねると、「お寺サンに食べ物もらってもらおうと、誰か困っている人にあげてくれるかと思って」と答えた。私は、このお婆ちゃんにお寺の蓄財の意味を教えられた。

最近、フードバンクの活動が盛んになってきた。こうした活動は、本来はお寺の活動であった。こうした活動をどれくらいのお寺が記憶し伝承しているだろう。また、一般人たちにも、食べ物や金銭のゆとりをお寺に託そうとする意識もない。

#### 4. 将来

今、お寺を取り巻く環境が変化している。それにお寺はついて行けるだろうか？変化に対応するには、儀式のような明解なものが必要である。しかし、その明解な作法や荘厳だけを語り、仏に向き合うことのない僧に、仏教の将来を託すことはできない。